

奏



2015 SPRING Vol.43



公益財団法人 日本室内楽振興財団

同じ弦楽器だけで音を重ねる響きには、独特の快感がある。
クアルテットは、この楽器とこの人数でしかできない演奏だ。



左より大友さん、吉田さん、日下部さん、山田さん、西野さん

とが大きいですね。
日下部 ということは、コンクールでの受賞が大きなターニングポイントになった？
大友 はい。
日下部 そのことについて、今、悔いはないですか(笑)？
大友 (笑)悔いはないです。あの賞を戴いたことは「もっとクアルテットを続けてください」とい

陽ざしも明るくなって、桜の花も少しずつほころび始めた三月の下旬。昨年二十周年を迎えたクアルテット・エクセルシオのメンバー四名をお迎えし、クアルテットの魅力をはじめ、日本におけるクアルテットの現状などについてお伺いしました。弦楽四重奏団として常設での活動は、日本では唯一といってよいほど稀有な存在。それだけに、様々な興味深いお話が飛び出しました。和製クアルテットのトップの座に君臨する彼らの熱い思いをご紹介します。



2015年3月ホテルオークラ

「もっとクアルテットを続けてください」というメッセージを受け取った。——大友

日下部 今回は恒常的にクアルテットとして活動されているクアルテット・エクセルシオの皆さんをお迎えして、お話を伺いますが、まずは大友さん、「齋藤秀雄メモリアル基金賞」の受賞、おめでとうございます。

大友 ありがとうございます。

日下部 少し受賞された賞についてお話ししていただけますか？

大友 これは、公益財団法人ソニー音楽財団が、二〇〇二年に創設したもので、前年度の活躍が認められた若手チェリストと指揮者を対象に選考し、それぞれ各一人ずつを表彰するものなんです。

日下部 加えて、クアルテット・エクセルシオ結成二十年目に、第十六回「ホテルオークラ音楽賞」も受賞されたそうですね。重ねておめでとうございます。

大友 ありがとうございます。これは、主にソリストが受賞するものだったので、クアルテットとしての演奏が認められたのは、すごく嬉しかったですね。

日下部 大友さんのようにチェリストであって、弦楽四重奏を中心的にしている方は他に

れますか？

大友 恒常的となると、ほとんどいないと思います。

日下部 残念ながら、そうですね。では、大友さんは、どのような動機でクアルテットを始めたのでしょうか？

大友 音楽学校入学時は、まだ何がしたいかを考えていたわけではありません。でも、学校でアンサンブルなど、様々なことを経験するうちに、自然とクアルテットに興味を持ち始めたという感じですね。責任を持つてクアルテットを続けなければいけないと思ったのは、第二回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ(一九九六年)で受賞したこ



大友さん

うメッセージを受け取ったことだと思っています。若いクアルテットのグループは、続ける基盤が作れずにやめていくケースが多くて、そうした意味では、大切な基盤を戴けたと感じましたね。

大友な苦労もあるジャンルですが、その代わりに得られる充実感も非常に深い。——西野

日下部 西野さんがクアルテットを始められた動機はなんですか？

西野 高校まではソロの勉強をしていましたが、大学に入って室内楽の授業を受けるようになって、なんとなく同じ門下生の気の合う女性三人組で、クアルテットでもしようかという話になって、思いつきで始めた感じですね。

日下部 それがこの三人？

西野 吉田さんと、もうひとりの女性とでスタートしました。山田さんは二代目のセカンドヴァイオリニストなんです。

日下部 なるほど。では、桐朋学園時代の仲の良い友達がい

からクアルテットを始めたということですね。

西野 はい。それで、チェリストがいなかったのが、先輩の中から探しました。それも大友さんではなくて、初代の方です。

日下部 では、クアルテットとして、今はどう感じてらっしゃいますか？

西野 悔いはないですね(笑)。大変な苦労もあるジャンルですが、その代わりに得られる充実感も非常に深い。また、自分らしい人生を自分たちで選んで作っていつている感じは好きですね。



西野さん

日下部 一つの道を選んで悔いなしということですね。

西野 そうですね。海外で演奏活動ができるチャンスがあれば、どうなっていたかと考えることもありますが、だからといって、今、私たちが日本でやっていることが残念だと思うことはないですね。まだ、成功してい

るとはいえない状態ではありませんが(笑)。

日下部 いやあ、立派なものですよ。今、日本で恒常的にクアルテットを続けるだけでも素晴らしいことですからね。では、吉田さんはいかがですか？



日下部さん

吉田 西野さんと同じ桐朋学園だったので、動機は同じです。私は元々ヴァイオリンをしていたのですが、クアルテットを始め、ヴァイオリンの魅力に気づけたのは良かったと思います。十数年やってきたヴァイオリンをやめて、ヴァイオリンに変更するのは大決心でしたが、ヴァイオリンに変わって、これでやっていこうと思いが固まりましたね。

日下部 それについては…

吉田 悔いはないですね(笑)。高校入学時に一年浪人をしたのですが、それがなかったら、このメンバーとも出会えなかったし、二十年もクアルテットを続けることはできなかった。そうし

【大友 肇】(チェロ)

桐朋学園大学音楽学部を経て同大研究科修了。1994年京都芸術祭新人賞受賞。第4回日本室内楽コンクール入選。2014年第13回齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞。これまでに井上頼豊、津田朝子、勝田聰一の各氏に師事。

【吉田 有紀子】(ヴァイオリン)

桐朋学園大学音楽学部を経て同大研究科修了。1991年霧島国際音楽祭奨励賞受賞。第1回淡路島しづかホールヴァイオリンコンクール第3位。1998年サイトウキネンオーケストラに参加。これまでにヴァイオリンを天満敦子、鷺見健彰、ヴァイオリンを岡田功子、サンコ・ガヴリロフの各氏に師事。

【山田 百子】(第2ヴァイオリン)

桐朋学園大学卒業。1996年ドイツ・ケルン国立音楽大学大学院副首席で卒業。芸術家称号取得。1995、96年ドイツ・シュレスヴィヒホルシュタイン音楽祭のアルバン・ベルク弦楽四重奏団の講習に参加。2004年よりクアルテット・エクセルシオ。これまでにヴァイオリンを小林陽子、篠崎功子、サンコ・ガヴリロフの各氏に師事。

【西野 ゆか】(第1ヴァイオリン)

桐朋学園大学音楽学部を経て同大研究科修了。第45回全日本学生音楽コンクール・高校の部第2位。1996年桐朋学園の推薦によりタングルウッド音楽祭に参加。1996年よりサイトウキネンオーケストラに参加。これまでに梅津南美子、鷺見健彰の各氏に師事。

【クアルテット・エクセルシオ】

年間70回以上の公演を行う。日本では唯一と言っていい常設の弦楽四重奏団。定期演奏会では、ベートーヴェンを軸に王道レパートリーを展開させ、1994年結成、昨年20周年を迎えた。1996年第2回大阪国際室内楽コンクール第1部門第2位。2000年イタリアの第5回パオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール最高位受賞。幼児や学生のためのコンサート等を通じて、室内楽を広める活動にも熱心に取り組んでいる。

【日下部 吉彦】(司会)

音楽評論家。1952年同志社大学英文科卒業。同年朝日新聞入社。58年朝日放送に転じ、音楽番組プロデューサー、解説委員を経て解説委員長を歴任。音楽評論の第一線で活躍中。大阪音楽大学客員教授。第8回大阪国際室内楽フェスタの審査員長。

PROFILE

敬称略

た意味では幸せなので、悔いはないです。

日下部 ヴィオラにしたのはクアルテット結成がきっかけなんですか？

吉田 はい。エクセルシオともう一つのクアルテットを組んでいて、ファースト、セカンドを経験して、自分はヴィオラパートが一番落ち着くと感じたので、ヴィオラにしました。ヴァイオリンとヴィオラの両方をした方がいい気持ちもありましたが、どちらでも中途半端になると思って、大学三年でヴィオラを専攻しました。



吉田さん

日下部 なるほど。では、山田さんの動機は？

山田 私は結成十年目に入ったのですが、それが、クアルテットを本格的にするようになったきっかけです。クアルテットは高校の授業でもありましたが、面白く感じても、一年で解散することも多くて、なかなか続け

ることが出来なかった。卒業後、留学先でクアルテットをする機会があつて、そのまま続けたかったので、私が帰国をし



山田さん

なければならなくなつて一年半でやめました。帰国したのは、三人がコンクールで賞を取った一九九六年。そして二〇〇三年に誘いを受け、二〇〇四年に正式メンバーとなりました。

日下部 同じようにお聞きしますが、今、クアルテットをしていて悔いはないですか？

山田 職人技をしなくてはならないセカンドヴァイオリンは、少し特殊なので、自分の中でうまく整理できない部分もあつて、いろいろ悩むことはありました。でも、今ではこうして常設でクアルテットができるのは幸せだと思つています。曲も素晴らしいし、四人で切磋琢磨する時間は、何ものにも代えられない貴重な時間だと感じているので、悔いはないです。

この楽器で、この人数でしかできない演奏だと実感。——大友

日下部 では、クアルテットの魅力はなんでしょう？

大友 同じ弦楽器だけで音を重ねる響きには、独特の快感があるんですよ。瞬間的なことであつても、良い和音を鳴らせると至福を感じますし、音域のバランスや人数のバランスなどが完璧で、この楽器で、この人数でしかできない演奏だと実感しています。そうした快感を聴いていただきたいし、体感していただきたいと思つていますね。

日下部 なるほど。では、他のクアルテットを聞いて「あれをやりたい」と感じることはありますか？

西野 ありますね。特にヘンシエル・クアルテットはクアルテットとして優れていると思うし、ファーストヴァイオリンの個性の素晴らしさにも感動します。あのように弾きたいと思うと同時に、人を魅了するエネルギーのある演奏に憧れますね。

日下部 クアルテットで生活できると思っていましたか？

西野 現実是非常に厳しいですね。

大友 難しいとは思っていません。

日下部 では、他のことで稼いで生活をしながら、クアルテットを続けたいということ？

大友 いや、目標はクアルテットだけで生活していきたいと思つていますね。

吉田 海外では演奏活動しながら、四人で同じ学校の講師をするというの、素晴らしいと思います。日本ではまだそうしたケースはないですか？

大友 ないですね。音楽大学でもクアルテットは必須科目ではないし、専門科目でもあれば良いのですが、まだまだオマケの状態ですからね。

次の世代が先輩を目指して参加してくれると、さらに良いと思つています。——大友

日下部 何かアカデミー的な活動はしておられますか？

大友 はい。五年程前にサントリールホールが設立したサントリールホール室内楽アカデミーに

おいて、若い演奏家や音楽大学を卒業したばかりの方々を対象に、我々が講師をしています。

日下部 大阪でもホール主催で、ジャパン・クアルテットが実施していますね。そうした主軸となる教育的なことをもつとした思いはありますか？

大友 もちろんあります。サントリールホール室内楽アカデミーにおいて、少しずつ重ねながら広げていきたいと思つています。受講生は約二十名で、クアルテットにすると三〜四団体くらい。ピアノトリオもいますが、オーディションで選んだ人達を二年間みっちり指導するという環境になつています。

日下部 なるほど。受講生達がコンクールに出場して入賞すると嬉しいですね。そうした例はありますか？

大友 まだ入賞者はいませんが、前回の第八回大阪国際室内楽コンクール&フェスタで、クアルテットソレイユが予備審査を通過して参加でき、ボルドーのコンクールでも一次を通過しました。また、ピアノのアルク・トリオ

が、第八回大阪国際室内楽コンクールの一次を通過しましたね。

日下部 段階的にすすんでいくようで素晴らしいですね。教えた人が活躍するというのは、とても嬉しいことですよ。

大友 そうです。ね。彼らの活躍を見て、次の世代が先輩を目指して参加してくれると、さらに良いと思つています。



メディアが上手に仕掛ければ、環境はさらに良くなると思つています。——日下部

日下部 そうしたアカデミー活動以外に、クアルテットの営業的なことはしていますか？

大友 まだ順風満帆ではないですが、じわじわと行つてはいます。

日下部 日本室内楽振興財団のような機関がバックアップし

て、東京・大阪のような都市部だけでなく、地方都市などでも積極的にコンサートを実施すれば、クアルテットの知名度も上がりますし、営業もやりやすくなる。自分で営業活動をしなればならないのは大変だとは思いますが、日本室内楽振興財団のような強力な味方もいますから、上手く利用してください(笑)。

大友 大阪国際室内楽コンクール&フェスタの前に、何度かアウトリーチをさせていただき、昨年四月に実施しました。そうした機会は有り難いですね。

日下部 クアルテット・エクセルシオのようなスター的存在が誕生しているのだから、互いに上手く利用していけたら良いですね。



2014年4月関西大倉中学校高等学校にて

大友 有難うございます。本当にそう思います。

日下部 ルックスにも恵まれていらつしやるから、ぜひクアルテットの先頭に立つて活動してもらいたい。メディアが上手に仕掛ければ、環境はさらに良くなると思うし、可能性に火をともしないといけないと感じています。その火をともし役目は、メディアだと思つていますね。この間、大阪国際室内楽コンクール&フェスタも、深夜の時間帯だけれどもテレビでオンエアされたら、直ちに反響がありましたからね。やはり露出することが必要なんだと思つています。また、皆さん自身も、なにか面白い材料を作る工夫が必要なのだと思います。例えば、アメリカのアタッククアルテットは、舞台からお客様に対して、とてもあた

かい対応をしますよね。そうした姿勢も必要なのではないでしょうか。

大友 アタックは確かに面白いですね。

日下部 震災の支援曲「花が咲く」も良

かったですね。

吉田 あの曲は、昨年、私達も演奏させていただきました。

日下部 そうなんですか。彼らの演奏を見ましたが、非常に感動しました。周りのお客様も泣いていて、正直な話、弦楽四重奏の演奏でそんな光景が見られるとは思ってもいなかった。皆さんなら、そうした感動をつくれると思いますよ。

ヴァイオリニストが内声の面白さに気づいてくださると良い。——吉田

日下部 この二十間で危機感のようなものを感じたことはありませんか？

大友 時々ありましたが、最大に感じたのは、一九九六年の大阪国際室内楽コンクール&フェスタで賞をいただいた



第2回大阪国際室内楽コンクール第1部門第2位

スタで賞をいただいた迎りです。まだ演奏家として自立できていない状態なのに、その年に結婚し、九八年には子供が生まれ、二〇〇〇年にはボルチアーニのコンクールを受け

彰式に参加してもらいたいと思います。ただ一方には、クアルテットを続けるのが難しいという問題もありますよね。

日下部 解散というか経営できなくなるということですか？

山田 同じメンバーで継続できない部分もありますよね。

日下部 それは人間関係が崩れるということ？

大友 理由はいくつかあると思うのですが、続かないこと自体が大きな問題ですよ。もう少し頑張れば、クアルテットとしてやっていけるという目標があれば、また違ってくると思う。そうした意味でも、我々はさらに頑張つて、良い目標にならないければと思いますね。



日下部 お客様を楽しませることも考えなければいけないと思いますよ。最初から最後まで楽しませなくても良いけれど、どこかで楽しませる要素は必要だと思います。例えば、そう

るという修行段階で、クアルテットの練習に毎日出かけるのが収入にはつながらない…。それでもクアルテットをやるべきだと頑張つて、ボルチアーニで賞を

いただいたものの、それで急に仕事が増えることもなかった。その辺りが一番厳しくて、大きな危機感を感じましたね。

日下部 大阪国際室内楽コンクール&フェスタの受賞は、力になりましたか？

大友 はい。とても大きな力になりました。

日下部 そんな状況下で力になれたのは、我々としても嬉しいですね。では、西野さんは？

西野 危機感は常にあります。クアルテットを存続させるためには、お客様に聞き続けてもらつて、新しいお客様も獲得していかなければなりません。そのためにも、常に演奏レベルを高めて、そのレベルをキープしていくけない。そうした演奏力に

もらつて、新しいお客様も獲得していかなければなりません。そのためにも、常に演奏レベルを高めて、そのレベルをキープしていくけない。そうした演奏力に

したコーナーを設けるとか。そんな演出的なことが要ると思いますね。

大友 そうですね。自分達が好きな曲ばかり演奏するというのはダメですね。

吉田 そうなると、発表会みたいな雰囲気になる。



西野 研究発表会のような印象になりますよね。

日下部 それではお客様を楽しませるのは難しい…。

大友 ただ、現実には日本のクアルテットのほとんどがそのような状態なのではないでしょうか。だから、楽しむためには外国人グループの演奏を聞くとか…。

日下部 そうですね。日本人はみんな上手なのだけれど、アピール力が弱いので魅力が半減してしまふ…。そのハードルを越えるのが、これからの大きな課題なのかもしれません。みなさんは、長岡京室内アンサンブルをご存知ですか？

対する危機感がありますね。

日下部 吉田さんはいかがでしょう？

吉田 最大の危機感があったのは、十年程前にセカンドヴァイオリニストが辞めた時。当時、セカンドヴァイオリンをしたい人が少なく、クアルテット事態、存続できるかどうかという危機感がありました。

日下部 なるほど。やはりセカンドヴァイオリンをしたい人は少ないんですね。

吉田 そうですね。これは私の印象ですが、やはりヴァイオリニストはメロディを弾きたい人が多く、そのメロディラインの下でセカンドやヴィオラのパートをしたいという人は非常に少ないように思います。でも、そうしたパートで、ヴァイオリニストが内声の面白さに気づいてくださると良いと思いますね。

日下部 本当にそうですよ。では、山田さんの危機感は何？

山田 クアルテットは四人で作る素晴らしさと、四人のバランスが崩れるとダメになるというところが隣り合わせにあると思うんです。だからバランスが崩れる

全員 はい。

日下部 あそここのコンサートによく行くのですが、すごく面白い。演奏者がそれぞれ好きな位置に立つて自由に演奏しているようなのに、すごくまとまっている。代表者にどのように合わせているのかと聞いたら、「みんなの気合で合ませます」と。そうした気合のようなものは、自然と観客に伝わってきますよね。そういうのを体感すると、やはりアンサンブルは楽しいと感じます。

子ども達にアプローチすることで、自ずとクアルテットに関わる層も厚くなる。——山田

日下部 では、今後の抱負や夢を教えてくださいませんか？

山田 子ども達に弦楽四重奏の魅力を伝えたいと思っています。子ども達にアプローチすることで、自ずとクアルテットに関わる層も厚くなると思うし、そうした活動を通して、自分達にも学びや経験になるという良い循環ができれば最高ですね。また、日本でもクアルテットができるという土壌を築き

ことに大きな危機感を感じます。また、十年前に私がクアルテット・エクセルシオに入った時にも危機感がありました。新しい



メンバーを入れて、さらに素晴らしくなろうとしているクアルテット・エクセルシオに、迷いのある人間が入るのは迷惑にならないかと、すごく不安でした。でも最近では、微かな手応えを感じ始めている自分もいて、今は危機感より期待感の方が高まってきているように感じます。

気合のようなものは、自然と観客に伝わってきます。——日下部

日下部 最近気になるのですが、大阪国際室内楽コンクール&フェスタでも、日本の団体が本選まで残れないという現状がありますね。

吉田 私たちも頑張らなくてはなりませんが、ぜひ、若いグループに自国のコンクールの表

上げて、第二のクアルテット・エクセルシオを作りたいですね。

大友 コンクールのジュニア部門にヴァイオリンやピアノはあるのに、室内楽がないのは非常に残念。コンクールのための結成でも良いので、クアルテットとして受賞できる機会があれば、良い流れができると思うんですよ。楽しさを知ること、志す人達も出てくるのではないかと。また、クアルテット・エクセルシオとしては、さらに本番回数を増やして、一生クアルテットを続けていければと思っています。



2014年4月大阪芸術大学スカイキャンパスにて

西野 大友さんと同じく、少しでも長く継続していきたいですね。また、クアルテットは良いジャンルだと、自信を持って勧められるような環境にしたいというのも夢ですね。

吉田 私もみんなと一緒に少しでも長くクアルテット・エクセルシオの一員でいたいと思います。

日下部 クアルテットの先頭に立つみなさんに期待すると共に応援しております。本日は、有難うございました。

音楽文化をささぐえる

大阪アーティスト協会 代表

黒川 浩明

大阪アーティスト協会は今年九月に三十周年を迎える。一九八二年神戸コンサート協会大阪事務所として設立。神戸コンサート協会より組織改編を行い、一九八五年に大阪アーティスト協会として発足した。これまで三十年間にわたって関西を中心としたアーティストの演奏活動がスムーズに行えるよう縁の下力持ちとしてサポート、地域文化の向上を主な目的として地道な活動を続けてきた。十周年、二十周年と順調に歩んできたが、さすがに三十年の壁は高い……。コツコツと頑張るしかない。



一九七〇年、世紀の大坂万博「エキスポクラシックス」、その前年に棍本音楽事務所に入社した。世界の著名アーティストたちの集いに日本中の音楽ファンが狂喜した。その後年月が経過し、十年を人生の一区切りとして棍本を退社



30周年記念パーティ(2015年1月16日)

筋榮二氏の全面協力のもと二九八二年神戸コンサート協会大阪事務所を開設し、テレマン協会の延原武春氏が事務所の隣

を使つていよいよ力になってくれた。大阪に日本初のコンサート専用ホール「ザ・シンフォニーホール」ができたのはちょうどこの頃だ。その後一九八六年に東京にサントリーホールができた。一九九〇年には室内楽専用の「いずみホール」ができ、その後一九九五年に東京に紀尾井ホールができ、大阪にはさらに「ザ・フェニックスホール」ができた。確かにホールの数では東京には及ばないが、日本のオペラや落語も「関西発」なのである。文化の発信源は関西であるのは誇らしいことだが、今や関西は一地方化し、元気がないのが現状なの。大阪都構想も他人事ではなく、一人一人の意識改革を望みたいものだ。

独立した当初、地元関西の音楽家たちにとのように応えることが出来るのか考えた。本番直前というのは著名アーティストであっても極度の緊張感を拭いきれない。そういう人たちを迎えるに当時のホールの楽屋はどこも殺風景で寒々としていた。演歌歌手であれば、楽屋いっぱいに花が届くのであろうが、返って花粉等に対しアレルギー的な音楽家にとってはそういった花はロビーに飾って欲しいもの。そこで思いついたのが、当日のプログラムと一緒に「一輪のバラ」を楽屋のテーブルの上に添えておくことだった。この小さなささやかなプレゼントが大きな感動を与えることになった。初リサイクルでは世話になったと、今で

も懐かしく語ってくれる人がたくさんいる。幸せなことだ。一九八五年九月に神戸コンサート協会・大阪を展覧的に解消し、大阪アーティスト協会を設立した。自主コンサートの必然性も感じて「若い音楽家たちの飛翔」(今年で百四回)や、当時結成された松永みどり弦楽四重奏団との「室内楽への誘い」、そして「室内協奏曲の夕べ」等を手掛けた。気が付けば五年の月日が経ち、年間百七十公演を数える勢があった。一九九五年十周年の年、未曾有の「阪神淡路大震災」が勃発したが、大きなダメージは受けなかったが、勿論中止となるコンサートもあったり、何とか開催に踏み切るコンサートもあった

【プロフィール】

大阪アーティスト協会代表。(社)日本クラシック音楽事業協会、音楽プロデューサー協会会員。2005年8月より日本ユニセフ協会大阪支部評議員、2011年4月より大阪ユニセフ協会理事。2002~08年相愛大学音楽学部にて「アートマネジメント」の分野で若手の育成に手腕を示す。近年は大阪音楽大学、大阪芸術大学、神戸大学、京都女子大学他からインターンシップの学生を受け入れている。

りと対応に追われる毎日だった。数か月も経たないうちに、朝比奈隆氏の呼びかけで在阪オーケストラのすべてが一丸となり、ザ・シンフォニーホール、音楽家ユニオン関西、弊社全面協力のもと「復興の日々に」励ましのコンサート」が開催された。以後六年間続いたチャリティは四千四百二十四万円に及び、阪神間の保育園に約百台の電子ピアノも寄贈された。それらの出来事は音楽家自身が、音楽の持つ力、音楽の素晴らしさを再認識させられる出来事となった。

した。後年、産経新聞のベテラン記者、故栗飯原真氏が「大阪人」にこのように綴ってくれた。「夏来たりて陽光のもと、人はいつせいに海山へと向かう。コンサートホールは閑古鳥が鳴き、音楽家は本業の演奏を封印して半ばあきらめ顔。この季節は押し並べて「音楽」は置き忘れられ、レジャーに浮かれる季節となつて久しい。そんな二



ユニセフの募金活動

なるが、今年は三十周年記念としてザ・フェニックスホール、いずみホール、ザ・シンフォニーホールの三ホールに拡大し、計八公演開催を予定している。一九九八年、私たちは音楽を通してどのような社会貢献ができるのだろうか。大きな課題だった。何か継続的にできることはないか。同時に子どもたちの未来は当時も今も大きなテーマだ。私たちにはたくさんの人々が集まる音楽会があるが、そこで何かできないものか思いつく。訪ねた。ユニセフの活動は「世界の子どもたちの未来」がテーマとなっている。話を聞いてみるとユニセフの募金活動ができる場所というのが限られていて町を行き交う駅等のスポットやイベントの時にしかできないという。そこで、私たちが開催する音楽会の会場でユニセフのポストカードやグッズの販売と募金活動に全面的に協力しよう、とい



お子さまランチタイムコンサート(2013年)

一九九七年にはシューベルト、メンデルスゾーン、ブラームスといった三人の作曲家のメモリアルイヤーを迎え、その前年の年の瀬にとある居酒屋で音楽評論家の網干毅氏と盃を交わしながらこんなビッグイヤーに何もしないということはない!と語り合った。同じやるならフェスティバル(音楽祭)だね。網干氏の構成、監修のもと、制作・運営を大阪アーティスト協会が行い、「サマーミュージックフェスティバル大阪」がスタートした。地元関西の音楽家たちが集う都市型のフェ

スティバルの草分けとして定着

最大の賛辞として今も人生の励みとなつている。そして十年を区切りに一年間の充電期間を経て、構成監修は小味潤彦之氏に引き継がれ十八回目と

心に残っているようだ。少しも多くの子どもたちに音楽の素晴らしさを体感して欲しいものだ。

クラシック音楽の裾野を拡大することによって、企業としての社会貢献と子どもたちの未来、そして地域文化の向上が私たちの使命となりつつある。



耳を開いて 心を開いて

ピアニスト
碓山 典子

うだるような暑さの午後だった。街中はお昼寝タイムで静かに休憩中だろう。動きまわっているのは、元気な観光客と、夏と音楽の両方を満喫しようとしてきた人々ぐらいいのめらるう。大人気のバカンス地ニースは、私にとっては、まさに人生のターニングポイントとなった場所だ。そこでは幾つもの素晴らしい体験をしたけれど、一生忘れることのないひとコマが今で

も鮮明に浮かび上がる。当時のニースのコンセルヴァトワール：美しい白亜の建物。眩しい陽光に映える南特有の樹々。照りつける太陽とは対照的に、少しひんやりした教室の中。二台並んだピアノ。その日のレッスンは、ラヴェルのピアノ協奏曲ト長調だった。ジャック・ルヴィエ先生が隣のピアノに座って、オーケストラのパートを弾きながら熱心に教えて下さっていた。



【碓山典子(いかりやまのりこ)プロフィール】
神戸女学院大学音楽学部ピアノ科卒業。同研究生終了後、フランスに留学。パリ・エコール・ノルマル音楽院ピアノ科・室内楽科に学び、審査員満場一致でディプロマを得る。マリアン・リビツキー、ジャン・ファッシナ、ミカエル・アナンツ、ジャック・ルヴィエ、ミカエル・グラドコフスキーの各氏に師事。在学中から学長推薦でフランス各地の音楽祭やコンサートに出演し、いずれも高評を得ている実力派。得意のフランス音楽のみならず、バロックから近現代まで幅広いパートリートを誇り、ソロ・アンサンブルの両面で多彩な活動を展開している。特に現代音楽・新作の演奏は絶賛され、第一線の作曲家達の信頼も厚い。いずみホールレジデントオーケストラ「いずみシンフォニエッタ大阪」では、2000年の創設時からのメンバーとして数多くの新作初演に貢献している。カメラータトウキョウより「オパール光のソナタ/碓山典子プレイス西村朗」(レコード芸術特選盤)、「ラ・カンパネラ」(3巻にわたるフーランクピアノソロ全集(レコード芸術準特選盤)をリリース。

んという贅沢な時間だっただろう。音楽の神様が茶目っ気をおこして、プレゼントを下さったに違いない。

切りのいいところで、カントロフ先生は出て行かれた。ルヴィエ先生はといえば、何事もなかったように、つい今しがた弾いたところのテクニク上の注意を繰り返すのだった。そうして私は、レッスンを受けているうちに、次第に強い決意を固めていった。

実を言えば、ニースの夏期講習会に行ったのは、プロになるのを断念して自分の気持ちに整理をつけるための、卒業旅行のつもりだった。高校二年生で進路を音楽に決定するまでは、ほぼ独学だった。父が転勤族だったため、何度も引っ越しでレッスンが細切れだったためだ。せつかく素晴らしい先生に巡り合えても、数ヶ月でお別れという悲しい経験も多かった。もともと指は器用でよく回ってくれたが、大学に入って本格的に難しい曲を弾き始めると、だんだん歯が立たなくなってきた。しまいに無理がたたって腱鞘炎を起こしてしまった。そ



いずみシンフォニエッタ大阪

れまではあんなに楽しく弾いていたのに、練習はただの難行苦行でしかなくなり、演奏する喜びは何処かへ消し飛んで、辛くどんよりした日々が続いた。それ故に、ニースでの出来事は、もう一度一から勉強し直すという、当初とは正反対の決心をさせてくれただけでなく、音楽が持つ本来の力・不思議な魔力に目を向けさせてくれたのだった。

そして幾星霜。私は現在、いずみシンフォニエッタ大阪のメンバーとして、古典から新作初演まで幅広い演奏に関わっている。二管編成の室内オーケストラであると同時に、様々な楽器の組み合わせによる室内楽ユ

ニ第二章の途中だった。突然ドアが開いて、ジャン・ジャック・カントロフ先生がヴァイオリンを手にしたまま入ってこられた。練習の約束でもあったのだろう。ルヴィエ先生のレッスンは、いつも時間がのびてしまい、後にいけばいくほど開始時間も休憩時間もごっちゃになるのが常だったから。

「二楽章の途中だった。突然ドアが開いて、ジャン・ジャック・カントロフ先生がヴァイオリンを手にしたまま入ってこられた。練習の約束でもあったのだろう。ルヴィエ先生のレッスンは、いつも時間がのびてしまい、後にいけばいくほど開始時間も休憩時間もごっちゃになるのが常だったから。」

「そこは、ピアノはまだ漂っていた。いいか、オケの響

ニットでの演奏も多く、未だにたくさん教わるのがあって楽しくて仕方がない。

アンサンブルで「相手の音を聴く」のは、基本中の基本であることは誰でも知っている。合わせのテクニクとしては、経験で上手くなっているところも確かにある。しかし、それだけでは漠然としていて、どこをどう聴けばいいのかは実は深遠な課題なのだと思う。



ピラフォン4台、ピアノ2台と弦の編成で

など、挙げればキリがない。最後には「もつと室内楽を勉強しろ」で締めくくられるのがいつものパターンだった。

音楽家が技術を磨くのは大前提。五感を磨くのも必要不可欠。そして、その要となるのが耳を開くこと。心を開くことだとつくづく思う。対象が何であれ：つまり、神や自然、自分、他者、楽曲の何であつても：コミュニケーションを取ろうとする姿勢は、閉じているとは不可能だ。「奏でること」、それは私にとっては、二度限りの時間を創造すること同義である。演奏家仲間や聴いて下さる人々と音楽を共有できる以上の喜びを私は知らない。

「その音にヴィブラートをかけたいのが懐かしい。」
「タイの間にクレッシェンドして」
「開放弦の五度なんだから、もっと音程感を持って」
「その音はピッチ高めに出さないと晴れ晴れと響かない」
「タッチの前に、管を通して来る息の音が必要」

先日、パリで恩師の一人とお会いした。ここに書き綴ったようなことをお話ししたら、子供っぽい笑顔とともに、こんな言葉が返ってきた。
「ようやくapprentissage(見習い期間)修了つてわけさ、お互い長い道のりだからな」

写真：樋川智昭



音楽雑感



大阪大学大学院文学研究科教授

伊東 信宏

伊東信宏(いとう のぶひろ)・プロフィール
一九八〇年京都府生まれ。大阪大学文学部卒業。同大学院修了(文学博士)。リト音楽院(ハルビニ)などに留学。大阪教育大学、大阪大学文学部教授などを経て、現職。著書「バルトック」(中公新書、一九九七年)で吉田秀和賞、「中東欧音楽の回顧」(岩波書店、二〇〇九年)でサントリー学芸賞を受賞。最近の仕事として、「バルトックの民族音楽編曲」(大阪大学出版会、二〇二二年)がある。

フ・ファルツの楽師村巡り

数年前にマルリーゼ・フルマンという著者による『郭公の声とナイチンゲール』が『フ・ファルツの放浪楽師たち』(独語)という本を手に入れて、ずっと横目で見ていた。横目で見ていた、というのとは、つまり所々読んでみたのだけれど、どうもピンとこず、でもどうしても気になるので時々取り出しては斜め読みしていた、というような意味である。そこにはドイツのフ・ファルツに昔から楽師を生み出す村があり、毎年かなりの数の楽師たちが出稼ぎを行っていた、と書いてある。その話を学生たちにもしていたら、ゲッティンゲン大学に留学している秋山良都君が、偶然フ・ファルツ出身者と知り合いになって、現地を訪れてきたという。そこには立派な楽師博物館があつて、色々話も聞ける、というので、彼の案内

ンス音楽や行進曲、ケークウオークのようなアメリカの流行曲、さらには民謡や賛美歌の編曲もの、そしてオペラやオペレッタの人気曲のアレンジ、などだった。

もちろん中には歴史に名を留めている人もいる。たとえばダニエル・クントツ(一八六〇〜一九五九年)は、フ・ファルツのオーベルスタウフェンバッハという村の出身で、楽師としてアメリカに渡り、そこにとどまって音楽の修行を積み、ボストン交響楽団の創設メンバーとなった。あるいは、ジョージ・ドゥルム(一八七四〜一九五九年)は、エルデスバッハという村の出身で、アイルランドを経て、やがてアメリカに渡り、ニューヨークのバンドマスターとして名を馳せる。彼が作曲した「ハイル!アメリカ」は、今でも大統領就任式で演奏されている。だが、こういった形で名をなした人たちは例外的存在で、楽師たちの大部分は生涯、娯楽音楽を提供しながら、無名のままに歴史に埋もれていった。

次に訪れたのは、カイサー

で、先日ほんの数日だが行ってみた。

場所は現在の行政区で言えば、ドイツのラインラント・プファルツ州の南西部。カイザー・スラウテルンという街から北西の方向に点在する村々である。ドイツ全体で見ると、西の端、フランスとの国境近くで、実際ナポレオンの時代には一時フランスに属していた。マンハイムから五〇キロ、国境からも四、五〇キロといったところ。

最初に訪れたのは、クレーゼルという終着駅からバスで十分ほどの丘の上「フ・ファルツ楽師の国博物館」だ。リヒテンベルクというお城の一角である。この地域から生まれた楽師たちの歴史、有名な音楽家たち、その生活の様子など、なかなか充実した展示で、当時のアンサンブルの様子が人形で示してあつたり

ラウテルンから車で二〇分ほどのマケンバッハという村。ここには大きな楽友協会があり、その本部には立派なリハーサル室とならんで「西フ・ファルツ楽師博物館」が置かれている。館長のエルヴィル・ヘルトさんの案内で、大規模な楽器のコレクションや楽師関係の資料を見せてもらった。

楽器についていえば、この地域では、楽師たちの需要に応えるべく、楽器製作者、修理屋などがレベルの高い仕事を行っていたようだ。有名なのはサンダー家で、代々楽器の製作や補修を行っていたようだ。とりわけルドルフ・サンダー(一八六六〜一九四二年)の作る金管楽器は、ドイツ国内ばかりでなく、世界中で重用された。博物館には、「アマテイ」という銘のある楽器や、ジャンゴ・ラインハルトが所有していたというヴァイオリン、珍しいダブルネックの共鳴弦付きギター(バスギター)に、古いグレトリアン・シユタインヴェーク(スタンウェイの分家的メーカー)などだが、無造作に置いてある。秋山君は、トロンボーン



楽師たち人形。「フ・ファルツ楽師の国博物館」で。

後半が最盛期で、多い時には千人を超える数の音楽家たち(二説には二千五百人)がこの村から楽旅に出た、という。彼らは、ドイツ国内だけではなく、フランス、イギリスなどヨーロッパ各地は もちろん、遠くはアフリカ

ン奏者でもあるので、前述のサンダーのバリトン(?)を吹いてご機嫌だ。

楽師たちは、良い仕事にありつけば、かなりの儲けになつたらしい。財をなすと、彼らは村に帰つて家を建てた。そういう家には装飾付きの立派な張り出しが付いていて、その種の家は「楽師の館」と呼ばれて今でもいくつか残っている。

だが、数日の滞在では分からないことも多い。そもそも、そんなに儲かるなら、どうしてこの近辺の村だけが楽師を輩出して、他の地域にも出稼ぎの風習が広がらなかったのか。どうしてそれほど繁栄した楽師村が、ほとんど歴史に刻まれることなく消えてしまったのか。どうしてドイツ音楽にかなり詳しい人の間でも「フ・ファルツの楽師村」はほとんど知られていないのか。ユダヤ系の楽師は、この地域でもおそらく大きな役割を果たしていたらしいのだが、その実態はどのようなものだったのか、等々。数少ない先行文献を見た限りでは、やはりこの地が様々な領主によって支配さ

や新大陸、さらにはシベリアを超えて日本にまで来ていた。多くの楽師たちは、春に旅立ち、夏の間、各地で稼いで、秋に村に帰ってきて、冬の間は楽譜を整理したり、仲間と練習したりという生活を送つた、という。だが、新大陸のように遠出をする場合には、何年か旅先に滞在することも多かった。

その活動の場は、たとえば観光船、海水浴場、湯治場、サーカス、そして劇場やホテルなど、映画やラジオが現れる以前の様々な娯楽施設であった。楽器は、ヴァイオリンやチェロ等の弦楽器と、クラリネットや大小の金管楽器などの任意の組み合わせ。大抵は数人から、多くても十人程度の編成で活動していたようだ。演奏されていた曲は、演奏の場にもよるが、基本的にはポルカやワルツといったダ

れ、政治的に安定しなかったこと、その結果として職業組合の制限がなく、職業選択に自由があつたこと、などがこういった楽師たちが生まれる前提条件だったと書いてある。そのような前提のもとで、彼らはこの耕作には適さない土地にしがみつくよりも、村々をめぐるながら、何らかの手仕事や商売を



マケンバッハの村に残る「楽師の館」と思われる建物

行うことを選び、そのような仕事の重要な分野のひとつが音楽だった、ということになる。その過程で、楽器調達や演奏の修得、さらには楽旅の手配などのネットワークが整い、曲のレパートリーも蓄積されて、他の土地では真似のできない楽師供給システムが出来上がっていった、ということになるだろうか。秋山君がいつか、そのあたりを解明してくれることを期待している。

大阪参加団体ワンツー・ファイニッシュ

音楽ジャーナリスト

渡辺 和

2015ウイグモアホール国際弦楽四重奏コンクール

世界のメイジャー国際弦楽四重奏コンクールの中でも、ロンドンとはちよつと趣の違う大会だった。一九七八年にイングランド南部の港街ポーツマス音楽祭が発案、メニューイン卿に相談したところ、競合する大会がない弦楽四重奏の大会を提唱される。翌年に第二回が開催され、タカチユ弦楽四重奏団(以下Q)が優勝。一九八二年の第二回は優勝こそハーゲンQだが、メニューイン卿は二位の上海Qを高く評価し、文化大革命で西洋文化伝統を根絶やしにされた中国の西洋音楽への復帰を象徴する出来事となった。第四回からは財団法人化されロンドンのシティに移動。一九九九年のメニューイン卿没までは、予選に「ダース」の団体を世界各地から集める世界二巨大なアンサンブルコンクールだった。

こんなところでも弦楽四重奏を、と驚かされるような世界

中の団体が顔を揃えた初期のロンドン大会は、大阪フェスタを提唱したメニューイン卿らしく「弦楽四重奏を西欧エリート文化から脱却させる」という使命をハッキリと表に出した大会だった。筆者は一九九四年の第六回大会以降、三年毎にイースター前ロンドン滞在が恒例となっているが、二十を越える団体が次々と予選を弾いていた頃は、口さがないロンドンの評論家は「あの大会は一次は聴く必要な



前大会と大阪を連覇したアルカディアQと2位のマッコレQの合同演奏会。(2015年3月24日・ウイグモアホール)

い」と陰口を叩いていたものだ。今世紀に入り、メニューイン卿という偉大な柱を失い、大会は迷走を始める。本選会場をウイグモアホールに移しBBCが全面的にバックアップする体制になりかけたり、運営財団もコンクールだけでなく教育プログラムや弦楽四重奏啓蒙イベントなど通年で活動するようになったり。試行錯誤を経て「予選はロイヤルアカデミー、本選はウイグモア、期間中にロンドン

各地の教会でのアウトリーチ・セッション」という形が定まり、参加団体も通常の弦楽四重奏コンクール同様の十団体程度となる。実質上の十二回目となる今回からは、「ロンドン」ではなく主催する「ウイグモアホール」が正式に大会の冠名となり、回数表記もされなくなった。

今の大会に、「大阪フェスタの弦楽四重奏ヴァージョン」という趣がないでもなかったメニューイン卿時代の国際的お祭り感はない。とはいえ、委員長をリンゼイQのクロツパーやチリンギリアンQのチリンギリアンが勤める審査員団の趣味や志向は独特。大陸で二世を風靡する元アルバン・ベルクQのビヒラーやハー

予選という言葉は使われず、「第一、二ラウンド」及び「ランチタイムコンサート」と呼称され、プログラムはふたつ。四日間の「ラウンド」はロイヤルアカデミーのデュークホールが会場で、二階には審査員団が陣取る。「ラウンド」で弾く演目からひとつずつ持ち出す「ランチタイムコンサート」が四日間のどこかに用意され、トラファルガー広場横の著名なセントマーチン・イン・ザ・ウィールド教会など、市内各地の教会を会場にしたアウトリーチ。この席には審査員はいない。つまり、聴衆前での本番練習セッションにも用いられるわけだ。

実質上の一次予選となる「ラウンド」の演目は、ひとつは「二〇〇三年大会以降弾かれていないハイドン作品+マーク・アンソニー・タネージ委嘱新作」。もうひとつは「モーツァルトの最後の弦楽四重奏十曲からひとつ+一九三〇年以降の任意作品」とされる。このプログラムミングは、審査という視点からすると極めて有り難い。世界の他のどのコンクール



新鋭のアイスリQ。本選進出は快挙。(デュークホール)

でも、古典は全演目にひとつが普通。だがこの大会は「学校や先生に習えないハイドン」と「古典中の古典たるモーツァルト」の両方を課し、弦楽四重奏の基礎能力たる古典への全く性格の異なる対処法を試す。若い弦楽四重奏を評価する理想的方法だ。他のコンクールも参考にして欲しいものである。

火曜日からの四日間「ラウンド」を終え、土曜日のセミファイナルとなる。いよいよ会場は憧れのウイグモアホールだ。ここからはチケットも有料となる。六団体が弾くのは、ベートーヴェンの中期以降一曲のみ。なにせもう古典とモダンをこれだけ聴いてしまったのだから、関心は「では、ベートーヴェンにどう対処するか」だ。興味深いのは演奏順。各団体はこのステージで弾く演目を事前に申し出ている。主催者のウイグモアホールが「土曜のマチネとソワレのふたつの演奏会」としてパランスが良くなるよう演奏順が決められる。大阪ではお馴染みの進出団体発表後の籤引き作



優勝したヴァン・カイックQ。(デュークホール)

業が、ロンドンで見られないのである。イースター休暇が始まる三月二十八日土曜日、午後二時からセッションは大阪にも参加したヴァン・カイックQ、ベルリンで名教師フェルツに学ぶアリンデQ、アメリカの名門音楽院出身者で日本人二人を含むアイスリQが登場。《ラズモフスキー》全三曲のコンサートとなる。午後七時半からはコンクールにはベテランの地元ピアッティQと、大阪ではヴァスミスQと名のり三位となったヴェローナQが《ラズモフスキー》二、三番を、最後にジュリアード音楽院でアタックQの後任として学生レジデンシーを勤めるアイオロスQが作品二、三〇の改訂終楽章版を披露する。堂々たるベートーヴェンな午後だった。

三団体が予告された翌日曜午後六時からの本選だが、四団体が参加を許される。ヴァン・カイックQとアイスリQがドビュッ

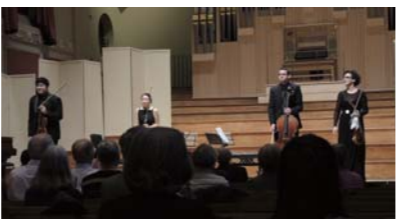
ゲンQのシムミットの流派、はたまたフランスで室内楽教育のルネサンスを成し遂げたプロカルテットらの価値観とはちよつと異なる、良くも悪くもいかに英国趣味な結果を出す個性的な大会となっている。

二〇一五年の大会は、音楽学校がイースター休暇に入るのを待つように、三月二十四日から二十九日まで開催された。この時期になる理由ははっきりしている。音楽大学の練習室やホールを、コンクールが自由に使えるからである。現在はロイヤルアカデミーがホストだが、メニューイン時代は会場となるシティのバービカンセンターにあるギルドホール音楽院が参加者のために準備されていた。

休暇で空っぽのアカデミー内教室を利用ししっかり練習も出来る参加十一団体は、ロンドンに招聘され(とはいえ大阪やパンプ、メルボルンら遠隔地とは違い、旅費全額は出ない)、最低でも三回は弾くことになる。一次

シ、ヴェローナQがラヴェル、そしてピアッティQがドヴォルザーク作品二〇六で大会を閉じた。本選の演目は参加団体が提出したロマン派レパートリー表から審査員団が指定した。四団体に増えたからか、結果としてシューベルトやブラームスなどの重厚なロマン派大曲は一度も舞台上で鳴らずに終わった大会となったのは、ちよつと珍しいかも。

さて、結果を急ぎ足で。ロンドン改めウイグモアホール大会、優勝はヴァン・カイックQ。第二位はヴェローナQとピアッティQ(委嘱作品賞も獲得)が分け、アイスリQが三位となる。大阪参加団体のワンツー・ファイニッシュというわけで、筆者としても大いに誇らしい晩であった。心残りがあるとしたら、途中のセッションに顔を出したアーヴィン・アルディッティ氏が洩らした「え、日本の団体はいない、ノーモア・トーキーかい…」という言葉である。



第2位となったヴァスミスQ改めヴェローナQ。(デュークホール)



表彰式で賞状を受け取るヴァン・カイックQ。(2015年3月29日・ウイグモアホール)



第72回定期演奏会(兵庫県立芸術文化センター 飯島隆撮影)

世界各地のオーディションで選ばれた若手演奏家で構成されるフレッシュでインターナショナルなオーケストラ「兵庫芸術文化センター管弦楽団」(以下「PACオケ」)を訪問しました。

佐渡裕芸術監督が率いる「PACオケ」は定期演奏会・室内楽演奏会の他、兵庫県内の中学・年生を対象にした「わくわくオーケストラ教室」など他のオーケストラとは違った様々な活動を行っています。

「PACオケ」誕生の準備段階から携わった林伸光ゼネラルマネージャーと近藤史夫楽団長にお話を伺いました。

◆誕生

兵庫県では、一九八八年に開催した「第三回国民文化祭」を契機に、阪神間に二十一世紀の芸術文化の殿堂を建設する計画を進めていたが、一九九五年に発生し未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災により、計画は中断を余儀なくされた。しかし、音楽・演劇を問わず多くの芸術家たちが被災地を訪れ人々を勇気づけるなど、芸術文化が心の復興に大きな役割を果たした教訓を踏まえ、厳しい財政状況の中ではあったが、芸術文化の拠点施設をつくり、そこにオーケストラという発

信装置を加え、劇場とオーケストラを震災復興の象徴にしようという機運が高まった。そして、ソフト先行事業の一つとして「ひょうごオリジナル音楽公演事業」を二〇〇〇年にスタートさせ、その中で、佐渡裕氏、大友直人氏といった世界的な指揮者をはじめとする優れた音楽家たちの兵庫公演を独自企画によって実現した。二〇〇二年に指揮者の佐渡裕氏を芸術監督に迎え、楽団設立の準備を進め、二〇〇五年「PACオケ」は兵庫県立芸術文化センターと共に生まれた。

◆プロフェッショナルとアカデミー

佐渡氏の考えの基になっているのは一九九〇年札幌で生まれた

立つて行ったプレーヤーはおよそ百四十人、その多くは国内外のオーケストラで活躍している。

◆演奏活動

芸術文化センターの年間の主催公演数は三百回を超え、うち「PACオケ」は約百二十公演を行う。コアメンバー(定員四十八名)を中心に内外の指揮者、演奏家を招いて、同一演目三公演を行う年間九回の定期演奏会のほか、名曲コンサート、小編成の室内オーケストラ、室内楽シリーズ、特別演奏会などを行っている。「PACオケ」はメンバーもゲストも欧米からの演奏家が多く来ることからシーズンのスタートを九月にしており、二〇二二年からはシーズンオープニングフェスティバルを兵庫県各地の公立文化施設と連携し行っている。佐渡芸術監督がこだわりを持ってプロデュースする夏のオペラ公演、今年「椿姫」を上演する。オーケストラピットから舞台を彩るこの公演も「PACオケ」にとって欠かせない存在となっている。

◆展望(チャレンジ)

他のオーケストラにない多彩な活動を続けている「PACオケ」の今後のチャレンジを林ゼネラルマネージャーに伺ったところ、「海外に行きたい気持ちがあり、成果発表をしてみたい。しかし、育成型のオーケストラなので、段々うまくなつて頂点に行くという形ではないと思う。海外に行くとするば育成型の音楽祭の場に行く方が似合うだろう」と話していた。

また、県内外での演奏活動とともに、普段ホールに足を運ぶことが難しい方々に音楽を届けるため、兵庫県内各地の学校や福祉施設などを小編成のアンサンブルにお越し頂いた方の中で、初めて室内楽のコンサートへ来たというお客様から「初めて生の弦楽器の音を聴き、とても感動した。」と感想をいただきました。私達はこのように一人でも多くの方に、室内楽の素晴らしさを伝えるために活動しております。

「グランプリコンサート2014」を終えて アルカディア・クアルテット



ルは「大阪」に決めていたそうです。その理由の一つとして「大阪国際室内楽コンクールは、ヨーロッパで大変評判が良く、レベルも高い。そこで優勝すること、今後大きなターゲットになるであろうアジア市場へアピールができる。」と考えたという事でした。実際に大阪のコンクールで優勝して、また残念ながらアジアからの誘いは無いが、様々な国から招待状が届いたということでした。この事は、世界における「大阪国際室内楽コンクール」の影響力の大きさを感ずると同時に、大きな国際コンクールをひとつ優勝したぐらいでは、演奏者が満足できるような大きな変化を生まな

いですが、コンクールでの課題曲でもあったヤナーチーク「内緒の手紙」、メンデルスゾーンの四番、そして彼らが特別に思いを込めているバルトークは、ルーマニア民俗舞曲がアンコールで演奏され、お客様にとって満足感たっぷりのコンサートとなりました。最後になります、今回ホー

ますが、皆様のご協力がなければ活動することは出来ません。この度、このように円滑に活動させていただきましたことに対し、ご協賛頂いた各社、共催の日本テレビ系列各放送局、また各地ホールの皆様のご尽力に改めてお礼申し上げます。

グランプリ・コンサート

2014で演奏しましたのは、昨年の行われました第八回大阪国際室内楽コンクールの第一部門(弦楽四重奏)で優勝しましたルーマニアのアルカディア・クアルテットです。

彼らは大阪に出場する前に、ロンドンをはじめとする大きな国際コンクールに優勝して

次、演奏プログラムにつ

日時	公演名	会場
10月30日(木)	札幌	STVホール
11月1日(土)	三重	三重県文化会館小ホール
3日(月)	熊本	益城町文化会館
5日(水)	大分	別府大学大分キャンパス文化ホール
7日(金)	広島	庄原市民会館
9日(日)	東京	津田ホール
11日(火)	鳥取	県民ふれあい会館
13日(木)	高岡	富山県高岡文化ホール
15日(土)	京都	銅駝会館
17日(月)	大阪	いずみホール

グランプリコンサート2015で演奏する トリオ・ラファール(スイス)のピアニスト、マキ・ヴィーダーケアーが財団を表彰訪問!



トリオ・ラファール(スイス)のピアニストが財団事務所へ表彰訪問しました。今年秋のグランプリ・コンサートに再来日することに対して「今から秋のコンサートツアーが

楽しみで仕方ありません。日本の皆様、今、ヨーロッパで大変人気のある、ピアノ三重奏を聴きには非ホールまで足を運びください。皆様のお越しをお待ちしております。」と流暢な日本語で答えてくれました。さてマキさんが、なぜ流暢な日本語で話すのでしょうか? 謎解きはグランプリ・コンサートの各会場でご確認ください。





公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業



大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

東洋紡績株式会社
株式会社ワコール

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社近畿大阪銀行
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
株式会社りそな銀行

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
新日鐵住金株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

野村證券株式会社

株式会社日建設計
株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

KDDI株式会社
西日本電信電話株式会社
株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
読売テレビ放送株式会社

(関連業種別50音順)

平成26年度 第2回理事会開催



理事会

平成26年度第2回理事会が、平成27年3月17日(火)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。会議の冒頭、秋山会長の挨拶があり、その後、越智理事長が議長となって平成27年度事業計画書及び収支予算書の承認と平成26年度臨時評議員会招集の件が審議され、可決承認されました。

会議の終わりに堤剛理事より第2回大阪国際室内楽コンクール第1部門(弦楽四重奏)で2位となった「クアルテット・エクセルシオ」が結成20周年を迎えたことは素晴らしいことだとの挨拶がありました。

平成26年度 臨時評議員会開催



評議員会

平成26年度臨時評議員会が、平成27年3月24日(火)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。会議の初めに越智理事長の挨拶があり、その後評議員の互選で村上仁志評議員を議長に選出して、先の理事会で承認された平成27年度事業計画書及び収支予算書が審議され、可決承認されました。

また、評議員4名の選出についても可決承認されました。会議の終わりに梅本俊和評議員から第8回大阪国際室内楽コンクール第2部門1位のピアニトリオ「トリオ・ラファール」が11月に日本各地で行うグランプリ・コンサートを楽しみにしていると挨拶がありました。

なお、新たに選出された評議員は次の方々です。

- 評議員 池田 仁 (アサヒビール)
小田 史幸 (清水建設)
金井 隆夫 (大成建設)
松永 茂樹 (電通) (敬称略、企業名50音順)

平成27年度助成金交付予定事業決定

平成27年度の助成金交付事業は1月19日(月)の選考委員会で厳正な審議の結果、申請総数16件のうち対象外を除く14件から下記の7件が選考されました。

	事業名	申請者	開催地
1	シヨスタコーヴィチの自画像II、III	古典四重奏団 田崎 端博	東京・埼玉
2	室内楽の夕べ ヤスス弦楽四重奏団&中壘ユリコ	中壘 ユリコ	兵庫
3	Reine Pur 第9回「トリオ」	東京-ウィーン弦楽三重奏団 平野 玲音	東京
4	デンハーグピアノ五重奏団室内楽定期演奏会 プレイエルで聴く19世紀パリのサロンに集うヴィルトゥオーゾたち	デンハーグピアノ五重奏団 小川 加恵	岐阜
5	ルートヴィヒ・チェンバー・プレイヤーズ演奏会	ルートヴィヒ・プレイヤーズ 日本公演実行委員会広瀬公美子	東京
6	Ensemble ZAZA 2015 コンサート	ながらの座・座 橋本 敏子	滋賀
7	いわき室内楽協会コンサート2015/2016	いわき室内楽協会 九里 孝雄	福島 いわき

- [選考委員] 委員長 藤田 由之 (指揮・評論) 委員 三宅 幸夫 (慶應義塾大学名誉教授)
委員 青澤 隆明 (評論) 委員 横原 千史 (評論)
委員 根岸 一美 (同志社大学教授) (敬称略、委員名50音順)

C O N T E N T S

座談会 クアルテット・エクセルシオ20周年 司会:日下部吉彦 出席者:クアルテット・エクセルシオ (大友肇/吉田有紀子/山田百子/西野ゆか)1	大阪参加団体ワンツー・フィニッシュ ~2015ウイグモアホール国際弦楽四重奏コンクール~ 渡辺和13
音楽文化をささえる 大阪アーティスト協会代表 黒川浩明7	楽団探訪 兵庫芸術文化センター管弦楽団15
奏でるよるこび 耳を開いて 心を開いて ピアニスト 碓山典子9	「グランプリ・コンサート2014」を終えて アルカディア・クアルテット16
音楽雑感 プファルツの楽師村巡り 伊東信宏11	JCMF NEWS17 平成27年度助成金交付予定事業決定17 公益財団法人日本室内楽振興財団支援企業18

表紙はバハ画像 アイゼナハ(ドイツ)

こころのリフレッシュ、足りてますか？

テレビや雑誌、インターネット、
溢れんばかりな情報過剰。
目や耳のみの情報ばかりで
まるで見知ったかのような気分
になっていませんか？

一步世界へと踏み出せば
五感を刺激する感動に
身体ばかりでなく、心もリフレッシュ。

私たちJTBは
世界各地の癒しスポットをご案内し
旅のお手伝いをいたします。



JTB西日本
海外旅行西日本支店

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8(本町クロスビル9階)

TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790

担当:飛松 智久

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail zaidan@jcmf.or.jp

Vol.43

平成27年4月27日